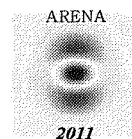


「京大天皇事件」から技術史家へ 中岡哲郎氏に聞く



今西 一 ●小樽商科大学商学部教授

はじめに

中岡哲郎氏は、日本を代表する技術史の研究者である。私も若い頃は、氏の著書『工場の哲学』（平凡社、1971年）を持って、農村調査の合間に京都府下の工場をまわったものである。ともかくお会いして、その聡明さには驚かされた。そして、何よりも歳を超えて、衰えぬその知的探求心の強さにも驚嘆した。まさしく「名人に衰えなし」という格言の通りであった。ただ、この原稿を校正してもらっている最中に、入院され手術までされながら、手を入れていただいたのは、何とも申し訳ない限りである。大変なご苦勞をおかけしたことをお詫びする。

本インタビューは、戦後農民運動史研究会の一環として、2010年5月24日、西川長夫氏のお宅で持たれた。中岡氏のお連れ合いの中岡百合氏も参加していただき、インタビューの後には、西川祐子氏の美味しい手料理も御馳走になった。インタビューには、研究会メンバーの安岡健一・番匠健一・影浦順子・竹川慎吾氏らも参加した。インタビューの後、参加者全員からの質疑応答があったが、残念ながら今回は中岡氏の健康状態などから、その部分は割愛することにした。なおテープ起こしには竹川慎吾・影浦順子氏らの手をわずらわした。記して感謝したい。

1 中岡少年の「天皇体験」

1969年、『朝日ジャーナル』が当時の世相―「大学闘争」を反映して、「激動の大学 戦後の証言」という興味深いシリーズを始めた。その第19回（1970年2月22日号）に中岡氏が「京大天皇事件」という記事を書いている。少し長くなるが、引用しておきたい。

全く私的な体験から語り始めることをゆるしていただきたい。（略）

それは私がたしか小学校の四年生のころであった。だから一九三八年ごろであった。日本の国で「神」としての天皇の権威がもっともすみずみまでゆきわたっていた時代である。ランドセルを背負って草履袋をふりまわしながら下校してゆく四、五人の小学生を想像していただきたい。

先頭に立っていた子どもが、ふりかえりながらいたずらそうな顔をしてきた。

「あのなあ、天皇陛下でも×××しはるやろか」

×××のところは今でも伏字にするのが慣習になっている性的な俗語である。

「きまっているやないか。そんなら何で皇太子殿下が生まれはったんや」

この答えがどんなに私のせいっぱいの合理主義の表現であったか、同世代以上の人間ならただちにわかってくれるだろうが、若い世代にわかってもらうことはむずかしい。奉安殿の前では深々と頭を下げるし、教育勅語の奉読中に頭をあげて御真影を盗み見するというような「不敬」なことは一度もしたことはなかった。そんな子どもの私に向って、質問は神としての天皇と性という二重のタブーにふれていたのだった。

私は、最初にこの文章を読んだとき、戦時体制のもとでも、子どもの世界のなかで、「天皇」を建前は「神聖」だと見えていても、猥談の世界のなかでは性的に「平等」な存在として認識していたのか、という意味で理解した。ところが、中岡氏に聞くと、真意は次のまわりの反応以降にある。

「うわあ、ものすごいこといいよる」

と、真先にはやしたてたのはI君だった。それにつられて回りの子どもたちもいつせいにはやしたてた。私は狼狽した。そしてその次の瞬間、言いようのない恐怖が突きあげてきた。私は走りだしていた。

天皇を嘲笑したことからくる「恐怖」の感情というのが、若い世代に一番理解できない点であろう。そして、「今から考えてみても私は、その時泣きながら帰って来た私を迎えて、母のとった処置はなかなか見事であったと思えるのだが、事情をきいた母はただ黙って神棚のローソクに火をつけたそして、」

「さあ神様に、ぼくはわるいことをしましたと行って、おがみなさい」

と、それだけを言ったのである。「母のいうとおりに神棚の前で手を合わせると、本当に、まるでつきものがおちたように、恐怖はあとかたもなく消えていたのである。中岡氏は、「そのつきあげてきた恐怖と、神棚の前で手を合わせた後の恐怖からの解放のさわやかさを二つながら私は忘れることが出来ない。それが私の最初の天皇体験を構成している。考えてみれば、理性の徹底への試みの、最初の敗北の体験であったともいえる」と語っている。

現代歴史学の天皇制研究のなかでも、一番欠けているのは、この天皇制が「恐怖の体系」であり、それが「国民宗教」とでも言えるように、人びとの生活のなかに根ざしていたという体験である。私の恩師たちは、戦後、「孝明天皇毒殺説」にせよ古代天皇＝「騎馬民族説」にせよ、その当否は別として、それが論壇で自由に語られた時の「新鮮さ」をよく口にした。おそらく現代の若者には、一番わかりにくい感情かもしれない。

2 昭和天皇への「公開質問状」

1951年11月12日、天皇が京都大学に「巡幸」する前の京都大学の状況を、中岡氏は次のように語っている。「この年ちょうど1年間だけ発行されて、京大の活動家たちにかなりよく読まれていた『平和の戦士』のとりあげていいる記事を瞥見しても当時の運動をとりまいていた状況がよくわかる」としている。「6号の一面トップ記事は、共産党京大細胞の機関紙『京大戦線』の発禁に対する抗議の記事である。大学当局による発禁ではない。法務庁特審局による発禁である。理由はもちろん、「占領政策違反」であった。同様に12号には、法経教室の地下にはってあった「日立大久保工場でナパーム弾製造進む」というピラが、政令325号違反容疑で学生部長立会いの下で川端署

の警官に押収されたことを報じている」。中岡氏は「それは戦前のことではない、戦後の民主日本の出来事である」と語っている。

また『『平和の戦士』にもっとも多く登場する記事は、小野信爾（現花園大助教授）救済に関する記事である。小野は反戦ビラをまいたかどで軍事裁判（もちろん米占領軍の）にかけられ重労働三年、罰金千ドルの判決をうけた。その小野に対する退学勧告をはねかえすことと、救援、減刑等が運動の一つの焦点であった」。中野氏は、東京の出陣選挙における16人の反軍裁判と小野事件を対峙している（拙稿「占領下東大の学生運動と「わだつみ会—岡田裕之氏に聞く（2）—」『商学討究』第60巻4号、2010年参照）。しかし小野氏は、山科の刑務所に収監され、沖縄送りにはならなかった。

中野氏は、「なぜ朝鮮戦争の初期に、日本の国内で小規模でもよい、とにかく大衆的な規模の公然たる反戦闘争がおこらなかったのだろうか。朝鮮を爆撃する飛行機は日本から出撃していたのである」という疑問を投げかけている。「ストックホルムアピール運動にせよ、再軍備反対闘争にせよ、「合法的な」平和運動は大きなひろがりをしめしていた」が、「それらは「朝鮮」に口をつむぐことによってのみその合法性を獲得していた。そして、共産党の火炎ビン闘争を含めて、公然たる反戦闘争がはじまるのは「占領」の圧力もとけた五二年からなのである。そこには日本の戦後に関して問い残された一つの問題があるように思える」という問題を提起する。東京の16人の反軍闘争も、50年の共産党の国際派と主流派の対立によって、「全国的な展開を妨げ」られていった。

このようななかで、昭和天皇の京大「行幸」が決まった。「時はちょうどサンフランシスコ講和条約の調印直後であり、問題の講話・安保条約の審議は巡幸と並行して国会でははげしく行なわれており、その天皇による認証が巡幸途中の奈良で行なわれるという、きわめて政治的な色彩にいろどられた巡幸だった」。「全面講話運動の一翼をになった京大同学会としては、ここは何かをせざるを得ないところに追い込まれたと言ってよかった」。しかし、「この時の同学会中執での討論は、延々としてすすまなかったという記憶がある」。「同学会は文化祭を天皇来学の時期にあわせて、7月に行なった原爆展を中心行事として対抗することをねらったが、大学はもちろん拒否し、原爆展そのものを不許可にした」。

「公開質問状を天皇宛に出すこと、なんらかの形の反戦の意思表示をもって迎えること、という最終方針のきまったのは天皇来学の日の数日前であった。その時質問状が天皇の手にとどくという期待よりも、事大主義の大学を最大限に困らせてやれという気持ちが必ずしもなかったとはいえない」というのが、当時の中岡氏らの心情であった。その「公開質問状」とは、次の通りである。

人間天皇に訴う！

私達は一個の人間として貴方をみる時、同情に耐えません。例えば、貴方は本部の美しい廊下を歩きながらその白い壁の裏側は法経教室のひびわれた壁であることは知ろうとはされない。貴方の行路は数週間も前から、何時何分にどこ、それから何分後にはどこときっちり定められていて、貴方は何らの自主性もなく、定まった時間に定まった場所を通らねばなりません。

貴方は一種の機械的人間であり、民衆支配のために自己の人間性を犠牲にした犠牲者であります。私たちはそのことを人間として貴方のために気の毒に思います。

しかし、貴方がかつて平和な宮殿の中において、その宮殿の外で多くの若者たちがわだつみの叫びをあげうらみをのんで死んでいることをしろうともされなかったこと。今と同じようにすじがきにしがたって歩き乍ら太平洋戦争のために軍国主義イデオロギーの支柱となられたこと

を考えると、私達はもはや貴方に同情していることはできないのです。しかし貴方は今も変わっていません。名前だけは人間天皇であるけれど、それがかつての神様天皇のデモクラシー版にすぎないことを私達は考えざるを得ず、又単独講和と再軍備の日本で、かつてと同じような戦争イデオロギーの一つの支柱としての役割を果たそうとしていることを認めざるを得ないのです。我々は勿論かつての貴方の責任を許しはしないけれど、もう一層貴方が同じあやまちをもう一度くり返さないことを望みます。

そのためには私達は貴方が退位され、天皇制が廃止されることをのぞむのですが、貴方自身それを望まぬとしても、少くとも一人の人間として憲法によって貴方に象徴されている人間達の叫びに耳をかたむけ、私たちの質問に人間として答えていただくことを希望するのです。

質問

一、もし日本が戦争にまきこまれそうな事態が起るならばかつて終戦の詔書において万世に平和の道を開く事を宣言された貴方は、個人としてでも拒否するように世界に訴える用意があるでしょうか。

二、貴方は日本に再軍備を強要される様な事態が起った時、憲法に於て武装放棄を宣言した日本国の天皇としてこれを拒否するよう呼びかけられる用意があるでしょうか。

三、貴方の行幸を理由として京都では多くの自由の制限が行われ、又準備のために貧しい市民に廻るべき数百万円が空費されています。貴方は民衆のためにこれらの不自由と空費を希望されるのでしょうか。

四、貴方が京大に来られて最も必要なことは教授の進講ではなくて大学の研究の実状を知り、学生の勉学、生活の実態を知ることであると思いますが、その点について学生と会って話合っていたいただきたいと思うのですが、不可能でしょうか。

五、広島、長崎の原爆の悲惨は、貴方も終戦の詔書で強調されていました。その事は私たちは全く同意見で、それを世界に徹底させるために原爆展を制作しましたが、その開催が貴方の来学を理由として妨げられています。貴方はそれを希望されるでしょうか。又私たちはとくに貴方にそれをみていただきたいと思いますが、見ていただけるでしょうか。

私たちはいまだ日本に於て貴方の持っている影響力が大であることを認めます。それ故にこそ、貴方が民衆支配の道具として使われなくて、平和な世界のために、意見をもった個人として努力されることに希望をつなぐものです。一国の象徴が民衆の幸福について、世界の平和について何らの意見ももたない方であるとすれば、それは日本の悲劇であるといわねばなりません。私達は貴方がこれらの質問によせられる回答に心から期待します。

昭和二十六年十一月十二日

京都大学同学会

天皇裕仁殿

この文章を、中岡氏に書くことを頼んだのは、京大学生細胞の指導者榎並公雄であり、文章の最後に「天皇裕仁殿」という宛名を入れたのは、日本共産党同学会の執行委員小畑哲雄氏であるが、それ以外は全て中岡氏の文章である。もちろん大学当局は受け取りを拒否した。作家の城山三郎氏が、この文章を読んで、『大義の末』（角川文庫、1975年）という小説を書き、作品のなかで引

用していることでも有名な文章である。

京都人らしい「いけず」な文章であるが、読み返して見ると内容は厳しい。「貴方は一種の機械的人間であり、民衆支配のために自己の人間性を犠牲にした犠牲者であります」としながらも、貴方が「平和な宮殿の中において、その宮殿の外で多くの若者たちがわだつみの叫びをあげうらみをのんで死んでいることをしろうともされなかった」と、その戦争責任を厳しく追及している。貴方は「太平洋戦争のために軍国主義イデオロギーの支柱」であったと指摘し、「名前だけは人間天皇」としても、「それがかつての神様天皇のデモクラシー版にすぎないことを私達は考えざるを得」ないとする。また「単独講和と再軍備の日本で、かつてと同じような戦争イデオロギーの一つの支柱としての役割を果たそうとしている」のであり、「私達は貴方が退位され、天皇制が廃止されることをのぞむ」と宣言している。戦前なら間違いなく「不敬罪」の対象になっていた文章である。相当な勇気のいる一文でもあった。

そのうえ本部校内から道一つ隔てた、吉田分校（現人間環境学部）の門の前には—

願

神様だったあなたの手で我々の先輩は戦場に殺されました。

もう絶対に神様になるのは止めて下さい。

“わだつみ”の声を叫ばせないで下さい。

京都大学学生一同

という大プラカードが立てかけられていた。

宮内省の役人も、後に記者会見で語っているが、天皇「巡幸」のなかで初めての事態であった。

3 「京大天皇事件」以後

中岡氏は、あの歴史的な「公開質問状」を書いたが、恐くなって12日には大学に行かなかったという。しかも不思議なことに、中岡氏には何の処分もなく、8人の同学会の役員が無期停学処分を受けた。青木宏（旧経三）・小畑哲雄（臨編文）・武田正博（新農二）・内山一雄（新教三）・倉野昌夫（臨編工）・古池健吉（新法三）・玉井仁（旧文三）・秋元恒生（新経三）氏の8名であった。その処分を受けた幾人かの学生の社会的影響について語っておきたい。当時の同学会中央委員の倉野昌夫氏は、1977年の5月21日、三高の同窓会の集りで、「京大天皇事件 学生時代のこと」という講演を行なっている（『神陵文庫 紅萌抄 合法I』三高自昭会、1998年）。彼は苦学生で、1944年に三高と海軍経理学校を受験し、翌45年に両校から合格通知が来たが、その一週間程前に父が急逝し、「母子家庭」になってしまったのである。

上級学校への進学を諦めようとしたが、「何とか頑張る」ことになった。「私の母親は“担ぎ屋”などをして、大体一週間に一度か二度のピッチで、米やら魚やらの重い荷物を背負って田舎から京都まで運び、私の所へ供給する傍ら、それらの品物を知人に買上げて頂いて、それが学費の足しになったという経緯が御座います」。倉野氏は、京大の電気工学科に入学するが、「旧制高校の過程を経ている臨時編入者は全員、教養課程を修了していると認めて頂きたい」という要求運動の先頭に立ったために、京大同学会の8人の中央委員の1人に選ばれてしまった。

しかもこの年の51年11月12日に「京大天皇事件」が起ったのである。その後1週間程なにご

ともなかったのだが、仲間と麻雀をやっていた時、「同学会の執行委員は多分停学か退学は免れんだろう」と冗談のように言われたのに対して、「そんな馬鹿なことことがあるか」と一笑に付した。しかし、翌朝、教室に行った友人が、あたふたと戻ってきて、中央執行委員全員が無期停学と掲示された紙を、掲示板からはがして持ってきてくれた。あわてて大学に行き、事務室に行ったが、「今日から君は学校へ来なくてもよろしい」と言い渡されました。

「時が経つにつれて、「停学」ということが如何に重要な問題であるかということが、段々分かって参りました。京都におりますと下宿の場所が知られてますから、全国あらゆるところから、右翼、或は暴力団のような思いがけないところから、色んな手紙やら投書やらが参りまして、天皇に非礼を働いたような非国民は殺してやるというようなことを書いたものまでありました。一方田舎で一人暮らしの母親の様子を聞きますと、天皇がその後引き続いて郡部の方を回っておられる最中でしたので、あそこの息子がこういうことだということになりますと、それこそ外へも出られないという状態で、ひっそりうちの中に引きこもっているということも聞こえて参りました。

このことが、クラス担当の教授から服部峻治郎学長に伝わり、服部学長は、52年の正月、倉野氏の郷里丹後半島の石川村まで出向いて、村の主立った人達を公民館に集めて、次のような話をしたそうである。

世間の色んな騒ぎからすると、誰かを処分しなければならなかったのはやむ得ない。だからといって集った千人余の学生を一人一人糺して、非礼があったかどうか、確認して非礼のあったものを処分することは不可能。処分するならば自治会、同学会の代議員全員では多過ぎる。執行委員8名、これがもう最良の手段であった。従って執行委員8名が天皇の前に立ちまわかって非礼を働いたというのではない、全体の責任者とみなし、教育的措置として停学処分を行なった。更には自治会である「同学会」は解散させたという経緯を説明されたそうです。

しかしこの話は、逆に倉持氏の処分が、完全なスケープゴートであったことを証明している。服部学長は、「ポケットマネーだから気にするなと言って、私の母親に十万円手渡して、帰って行かれた」そうである。大学卒業の初任給が3000円時代の大金である。服部学長も、「母子家庭」であった倉持氏への同情があっただろうが、この処分には相当に後ろめたい思いがあったのであろう。52年の5月13日に停学解除になって、東京のアルバイト先から大学に戻った。服部学長は、彼を授業料免除にし、就職の心配をして、9月卒業にしてくれたそうである。ただ、卒業の前に学園復興会議の荒神橋事件を経験している。

「犠牲者のその後」については、「青木は卒業後は大学院ではなく、教職員組合に職を得たと聞いた」としている。後には証券会社の重役になっている。小畑氏は、「停学中に京都のメーデーに参加したため謹慎中にも拘わらずということで、他の六名と同時に復学できず、遅れて解除された」。小畑氏については、拙稿「京大天皇事件前後—小畑哲雄氏に聞く—」（小樽商科大学『商学討究』第120輯、2010年）を読んでいただきたい。

一番数奇な人生をたどったのは玉井仁氏で、「停学中に起ったメーデー、宮城前の騒乱事件当時、全学連委員長であったため、当局から手配される身となり、そのため遂に復学できなかった。生家

から出て他家を継ぐことになった噂を聞いたのは、つい最近のことである」。なんと玉井氏は、白鳥事件の容疑者の一人（別人）と間違われ、逮捕されて裁判にまで出頭しているのである。その経緯を、当時読売新聞の北海道総局の記者であった作家の佐野洋氏が、『北の事件簿』（新潮社、1983年）で書いている。

この事件の関係者であり、中岡氏のインタビューにも出てくる榎並公雄氏については、盟友米田豊昭氏らと創った、都市科学研究所の1983年の倒産事件をルポした後藤正治氏の『私だけの勲章』（岩波書店、2005年）の一章「幻の革命」に詳しい。榎並氏は、1976年11月20日、48歳の若さで京都の自宅で逝去している。

4 山村工作隊の経験

1950年代、日本共産党の山村工作隊の一環として、「紙芝居」や幻燈を持って、農村を回った当時の学生の経験は悲惨であった。中岡氏は、「百姓一揆の幻燈」を持って、滋賀県大津市近辺の被差別部落をまわった経験を、次のように語っている。

ある山間の未解放部落で幻燈をやった時である。私はまず、その部落の家におどろかされてしまった。想像したよりもずっと大きな家がならんでいた。しかしその家の壁は泥でぬりかためだけの荒壁だった。私は、私たちにその部落の存在をおしえてくれた農民が、「彼らはかせぎもないくせに家だけはでかいのをたてたがる」と吐いてすてるようにいったことを思いだした。その家の大きさは彼らの、誰からも馬鹿にされたくないという気持ちをあらわしていた。そしてその荒縄の泥のぬりかたは、それにもかかわらず、彼らのまずしさをありありと締めしていた。そのことのなかに私達は彼らのうけて来た差別をみだし、そして感動した。

そこで幻燈を始めると、酔った小父さんは、「佐倉惣五郎というやつはエライ奴だ。といった。私は思わずニヤリとしたかもしれぬ」。ところが話が佳境に入ってくると、小父さんは—

なあ学生さんよ、しっかり勉強してえらい人になってくれよ。

こんな山奥にまで実地の経験をつみに修行にくるような人はきっとえらい人になる。あんたみたいなわしらのことをわかってくれる人が日本のえらい人になってくれんとあかんのや。

と言われて、中岡氏は「「えらい人になんか死んでもならないぞ!」とどなる位がせい一杯だった」と書いている。しかし、「そのような経験をとおして得たものを無意味な陶酔として否定し去ることは、私にはできない」としつつも、「国民の科学運動の挫折の原因は、感激が陶酔へ転化していく過程に、そしてそのなかで、もともと起源を同じくした当時の政治運動に従属させられてゆくことに抵抗できなかった弱さのなかに求められるべきであろう」としている。

石母田正氏の『歴史と民族の発見』を取り上げ、「彼は科学的な歴史家から一步ふみだして、陶酔へのみちを歩みかけていたのだ、中国革命を中心とするアジアの激動に刺激を汲みとっていた当時の左翼運動が、火炎びんと山村工作の極左行動に転落していった時に、同じ情勢から最大のエネルギーを汲みとっていた国民の科学運動は中国かぶれのみちをとおして、政治行動への一方的従属の解体のみちをたどっていくのはほとんど必然の勢いであった」と総括している（中岡哲郎『現代

における思想と行動』三一新書、1960年、70～74頁)。

この啓蒙運動に対して、最も厳しい批判を向けた人物に、吉本隆明氏がいる。「吉本は啓蒙主義に反対する。幻想に捉われている迷妄な大衆に対して、知識を与えてその幻想から脱却させるといふ啓蒙主義的な立場は、結局、新たな権力関係をつくりだし、それに対応する幻想を産み出すことになる。善や正義の立場にみずからをおき、その高みから教えを説こうとする知識人は、そうした自己正当化が権力行使の欲求への屈服であることに気づいていない。俗流社会主義、あるいはロシア化されたマルクス主義は、知的権力関係の病理を理解できず、必然的に党派主義的な権力体制の構築に向かっていく」のであると、啓蒙運動のもつ〈権力性〉を、鋭く批判する(島蘭進「吉本隆明の思想と宗教」、安丸良夫他編『戦後知の可能性』山川出版社、2010年、147～148頁)。

国民の科学運動と、その一環としての国民的歴史学運動は、50年代初頭の日本共産党の山村工作隊や火災瓶闘争と結びついていた側面があり、長い間タブーとして語られなかった。いや今でも語ることを拒否する人がいる。しかし近年、若手や中堅の研究者の間で、そのタブーを破り、ユニークな視覚から追求する研究が現れている。そのひとつは、花森重行氏の民科京都支部歴史部会の紙芝居『祇園祭』の上演運動の分析であり(「国民的歴史学運動期における政治の多様性」『新しい歴史学のために』第275号、2009年)、いま一つは、溝口健二監督の映画『山椒太夫』(1954年封切り)と歴史家林屋辰三郎との交流を追求した京楽真帆子氏の研究である(「時代劇映画と歴史学研究の邂逅」『人間文化』第26号、2010年)。今後の研究の進展を期待したい分野である。

中岡哲郎氏インタビュー

聞き手◎今西 一

1. ——天文少年と天皇

今西 1928年の7月12日に京都市でお生まれになったのですか。

中岡 ええ。

今西 お生まれになった場所はどこになるのですか？

中岡 田中神社というのご存知ですか？そのそばの田中里の内町です。父母は山口県から出てきたので、もともと京都人ではないわけです。

今西 お父さんとお母さんのお名前を教えてくださいませんか。

中岡 父は寿一。それから母は静子です。

今西 ご商売は何をやっておられたんですか？

中岡 父は小学校の先生です。

今西 お母さんはもう家庭でずっと、「家庭婦人」で過ごされたんですね？

中岡 京都へ移ってくる動機というのは、姉が二人、僕が一番下の男の子。二番目の姉が生まれたときに、お産の時に、女の人とお産と結びつけておこる病気だったんですね。なんていうか、月経の周期と関係があるんですけど。それと年に2回、これも非常に正確に、正月の少し前12月の終わりごろと。もう一つは夏至の前後に起こる、一種の「精神病」ですね。全然わからなくなるんです。結局、病院に入れるんですけども、田舎でそういうのを治療できる病院がないから、だから母親の病気が起こったときにすぐに入院できる病院がある場所というこ

とで、京都へ出てきたのです。

今西 お父さんはもともと山口で学校の先生をやっておられたのですか？

中岡 山口で小学校の校長をしていたのが辞めて、そして京都へ来て、そのへんのことは私知らんことですが、たぶん教頭ぐらいからやりなおしたんだと思います。

今西 教頭からもう一回ですか。

中岡 僕が中学の頃には、小学校の校長でした。

今西 ご兄弟は何人おられたのですか？

中岡 3人です。姉が2人、そして僕ですね。

今西 これは最初、天皇事件の『朝日ジャーナル』の記事のなかで、小学校の頃に天皇もセックスをするのかみたいな話をして、天皇制に疑問をもったという話を書いておられたんですけど、こういう話を小学校の頃にされたんですか？

中岡 それはなんていうか、話がうまく伝わってないかもしれないですね。京都へ行ってから、母のそういう病気があるもんだから、病気が起こる前1週間ぐらいは、近所の人と非常に具合が悪くなって。だから父親が苦勞してずっと小学校、何回変わったかな。4回、卒業するまでに4回小学校変わったんです。それで一番最後に、第二錦林小学校という、いまのちょうど楽友会館のすぐ手前。あそこが今はたしか中学だけれども、そこに通うてたときの話です。

今西 小学校4年生でおっしゃっておりますよね。

中岡 小学校の頃、田舎から府立医大で入学した親戚があつて、母の側からいうと、甥になるわけですね。府立医大に入った時から家に入りしていた。戦争で軍医になって、すぐに出征するんですけど、その時あずかった彼の蔵書が家に残っていて。それで小学校4年生だったとき、それをときどき広げて、女のあそこはどうなっているかとか（笑）。

今西 医学書ですね。

中岡 そういう勉強、そういうことをある程度の知識があつたわけです。だから、トイレへ行つたときに、友達が女の子のトイレはなんで



あんなにジャーという音がするんやというのに、それは女の尿道は男の尿道よりずっと短いからなんやと答える（笑）。そういう話をする仲だったわけですね。それである日、学校からの帰りに、あれに書いてあることは、僕と同じくらいませた子がいて。実は同窓会の時に、その話についてお前あのことを覚えているかと聞いても、本人は全然覚えていないんですね。それを突然5人くらいで帰る時に、ぱつと見て、お前な、天皇陛下は、オメコしはるんやろか言うて。それに僕はもう決まってるやないか、なんで皇太子が生まれはつたんやいうて。そして、もうまわりの4人が、うわあすごいこと言いよると言つて。僕は得意になって話したのに、わいわい騒がれて、だんだん怖くなって泣きながら家へ帰つていったわけ。母親がなんで泣いてるんやと、これは当然聞きますわね。で、実はこうこうこうでと話したら、ちょっと今から思つて不思議な、やっぱり病気さえなければえらい母親やつたと思うんですけどね。分かつたつと、神棚の前へ私をつれて行つて、ここへ座つて、神様私は天皇陛下に大変失礼なことを致しましたというて拝みなさいと。そのとおりにしたら、なんかぱあつと天が晴れるような感じですね、ずっとその悩みが消えたわけです。そ

の話があれに書いたわけ、そういう話なんです。
今西 やっぱ学校では、当時そういう天皇が神である、そういう軍国主義教育ですよ、今でいえばね。そういうことはかなり徹底して行われていたんですか？

中岡 だからあの、天皇の神聖というのは、そういうふうに建前としてあって。そしてしかし社会全体としてはやっぱり、だいたいそれに従っているんだと。だけど、一番端の方の世界ではね、やっぱりそういうことが子供でなくて、もし十数歳以上の大人であったらね、そういうことが疑問にもなるはずがないし、そしてあのそういうことを聞いたら恐らくそのとおりでいえば、笑い話になったろうと思いますね。ところが、子供ですから、つまりしっかり教え込まれているまだ年代なんですよ。だからあのごく普通の反応でしょうね。小学生としては。僕はあのやはりそういうことでもって、常に子供同士で話したときに解説していた。だから当然、当たり前やないかという言い方になったわけですね。

今西 天皇をめぐる猥談みたいなものはけっこう大人の世界でもありましたけど。でも、その当時は天皇への恐怖というのもすごかったですね。京都府立第一中学校に行かれるわけですね。

中岡 ええ。

今西 後の洛北高校ですよ。でもかなり進学校ですよ、この頃では。

中岡 進学校ですね。

今西 まあ一中、三高、京大というのは当時京都では一番エリートコースですよ。だから、失礼な言い方ですけど、小学校の頃から勉強はよくできたわけですか？

中岡 できたことはできたと思いますね。そういう、あのつまり4回、学校を変わるというような生活ですから、その4回目の学校です。で、僕が行くまではなんていうか、あの子が一番よくできるというて子が、僕が行ってからは、少し地位が危なくなっ、それで少しいじ

められたようなこともありました。

今西 当時は転校生に対するいじめみたいなものはひどかったんですか？よそから来た子に対して、京都は、町組がわりと強いですからね。

中岡 そういうものはあったと思うし、それから第二錦林小学校というのは、その前はですね、あの京都一中はそこにあった。それが、今ある洛北へ変わりました。そのあいた所につくられた。京都の人間のなかでは、一中、三高、京大と並んでいるわけですよ。その一中のあとに来たというので、というのでいじめが強かった。

今西 一中はエリート意識が強いでしょうね。当時のエリート校ですよ。

中岡 一緒に遊んでいた吉田山でチャンバラをやるというのが。それぐらいしかその当時は娯楽はなかった。校庭で野球をやるというのと吉田山でチャンバラをやるぐらいしか遊びがなかったですけども、吉田山でチャンバラをやった仲間なんか今考えてみると、郊外から明らかに来ている。戦前だからそういう越境というのはそれほど厳しくなかった。

今西 当時は小学区制をひいてませんからね。

中岡 だからあの校区の外から来ていた子が多いですね、多かった。

今西 もうだけど戦時色強くなってくると、食糧事情なんかもそろそろ悪くなってくる頃じゃないですか？41年、卒業されるのが45年になるんですから、その一中に行かれる頃は食糧事情がだんだん悪化してくる時代でしょう。

中岡 あのまあそれでも、本当にひもじい思いをするようになったのは43年ぐらいでしょうね。43、4年というのが、すごく食糧事情が悪くなった。

今西 とくに敗戦の1、2年前っていうのはものすごい悪化しますからね。その頃、やっぱり自然科学に関心を持たれたんでしょうか？

中岡 いわゆる科学少年ですね。

今西 科学書はまだそれほど規制されてなかったわけですか？自由に読めた方なんですか？

中岡 これはあちこちに書いていることですが、橋田文部大臣、彼が文部大臣になった時のスローガンってというのは、「科学する心」というスローガンだった。これはあの歴史的に言えますが、だいたい科学教育ってというのは、第一次大戦が終わる頃から大幅に改善されていて、そして研究開発っていうようなことも、やらなければならないといけないというか、それが日本の技術の一番遅れた部分であるという認識は、これは強かった。そしてあの科学教育を少しずつ、理工系の教育をちよつとずつ改善していかなければならないというのが、段々と広まってきて、戦前の一番頂点というのは昭和14年、15年でしょうね。それで、その頃は科学書というのが、啓蒙的な科学書がものすごくたくさん出た。そして啓蒙的な科学書のなかで、ベストセラーになった、例えばホグベンの『市民の科学』。ああいう本、一連の本というのは、これは唯研（唯物論研究会）のグループが意識的に翻訳しているんですね。そしてホグベンも含めて、その頃に訳されたさまざまな科学的な啓蒙書のなかの、とくにイギリス人が書いたもの、クラウザーだとか、バナールだとか、ホグベンだとか、そういうグループは左翼、ヨーロッパの社会民主党系の左翼ですね。そういう著者の書いているあの啓蒙書を、唯研の周辺にいた学者が意図的に訳している。

今西 その頃、バナールも翻訳は出ていたんですか？

中岡 ええ。バナールの本はちよつと記憶にありません。まあ、そういう時期に中学ぐらいにいた人間が、例えば広重徹と、その頃読んだものを突き合わせてみるとまったく一緒でした。そして、そのなかである程度、やっぱり非常に合理的にものを考えるということが作られていったと思います。

今西 われわれも高校時代は、自然科学はオパーリンとかバナールから入っていったんですよね。広重さんなんかもそうでしょうけど、バナールの科学の制度化論とかに興味がありまし

た。あれに非常に影響受けて、『歴史における科学』の翻訳が出た頃ですよ。でもたしかに当時影響があったボルケナウなんかを紹介されていて、『封建的世界像から市民的世界像へ』というのは、奈良本辰也さんらは読んでおられたみたいですね。

中岡 ボルケナウが読まれたのは戦後でしょうね。戦前に訳されているんだけど、読んだ人間はごく少数だったですね。ああいう本が僕ら、その当時の科学少年のなかに入り込んでくるということは全くなかった。

今西 一方で、軍国少年でもあったわけでしょう。また当時は、科学論の影響を受けておられたわけでしょう？

中岡 例えば、やっぱり広重、後藤邦夫、坂本賢三、そういう連中とその頃読んだ本を突き合わせてみると、読み物はそうですね。それから、木辺成麿『反射望遠鏡の作り方』だとか、共通するものがすごくありました。広重だけは、H.G. ウェルズを読んだと言っていたけど。それについてはいろいろ、いやそんなはずはないという説もあります。だから、橋田邦彦文部大臣の功績みたいなものが、我々の世代の科学史家を育てているという、そういう繋がりはあると思いますよ。

今西 先生は天文学にご興味をもたれたのはそういう関係なんですか？なぜ天文学を志したんですか？

中岡 まさにそういうことで。それもほぼ共通だと思いますけれども、天体観測をやるということです。それから京都一中では天文学同好会です。

今西 そんなにいい望遠鏡なんかあったんですか？

中岡 口径10センチぐらいの望遠鏡、ちゃんと赤道儀といって、要するに回転軸がきちり北極に合わされていて。それで回転軸のまわりに望遠鏡を回転させるだけで、星の動きを追跡できる赤道儀架がありました。

2. ——海兵、三高時代

今西 それを中学時代にやっておられて、京大で天文学をやろうと思って行かれるのですね。しかし、その前に海軍兵学校へ行かれますよね？海兵も当然エリート校ですけども。海兵に行った動機は何ですか？

中岡 それは何かを書いたことがあるんですけどね。非常に変な、完全に繋がっているか分からないんですけど、漱石の『こころ』が好きですね。要するに『こころ』の最後の文句までは覚えてないけれど。乃木大将の殉死を聞いて、そして主人公がなんか、明治という時代の精神のために殉死するという。そういう筋だったんです。それを読んでね、なんか突然、本当に突然。

今西 海軍兵学校へ行こうと。

中岡 時代の精神に殉死すると。これはその当時の少年にありがちな、ということはず絶対にないけれども。子供というのは突然そういうことを思うものです。『こころ』というのはものすごい好きだったからということもありますけどね。

今西 海軍兵学校というのはどこにあったんですか、当時は、江田島へ行かれたんですか？

中岡 兵学校の本校は江田島しかないです。その頃、兵学校予備校っていうのがあって、それはたしかどこにあったかな、岩国かどっかにありました。

今西 先生は、江田島に行かれたんですか？

中岡 本校は、本科の方は江田島にしかなかった。江田島のなかに大原分校というのと、本校があって、そして大原分校の608分隊でした。

今西 でも4月に行って8月に敗戦ですよ。だから4カ月ぐらいしか行ってない。

中岡 授業を受けた記憶というのは1カ月ぐらいしかなくて、あとの記憶は横穴を掘っていたと。

今西 当時は中学生でもそうでしたからね。勤労働員に駆りだされていましたからね。

中岡 中学の最終学年も勤労働員です。

今西 勤労働員はどこへ行かれたんですか？

中岡 勤労働員はね、今の勧業館っていうのは。

今西 岡崎に勧業会館がありますね。

中岡 今何になっているかよく知らないですけど、そこに国際航空の工場があって、そこですね。これは、いたのはやっぱり数カ月しか記憶がありません。

今西 敗戦になって、海軍兵学校を退学になって、そのあと1年半浪人されてますよね。なんか進学を断念して、田舎で農業をしようかとまじめに考えていたことがあるというふうを書いておられますけど。

中岡 転入試験というのがあったんですね。もと軍の学校にいた者を、旧制高等学校に入学させるかどうかということについてだいぶ議論があった。しかし、とりあえず旧制高等学校への転入はやるということになって、ごくわずかの定員で転入試験があって。これは受けたけど落ちたわけですね。それからしばらくの間、さまざまの旧軍の学校にいた者は入学させるなどか、させるとかいう議論があって。そして翌年の3月に入学試験を受けて一次は通って、二次の試験を受けて、その発表の寸前に、要するに旧軍学校にいた者はストップするというのがかかった。それはあの6月ぐらいまでずっと議論が続いて。そうでない人間は全部、発表があって、もう新学期が始まっているわけです。7月ぐらいまでになって、やっと入学させてもいいという。二次試験の結果が発表されたら、落ちていたわけです。

今西 その時はどこにおられたんですか、京都ですか？

中岡 京都。京都ですが、家は山科に変わっていました。山科の家はかなり広い面積の庭があって。そして田舎、つまり山口には、親は移ってきたけど、家は残っているわけですから。山口に帰って百姓になるかということで、試みに玉葱を植えてみたんです。そしたら、玉葱というのはものすごい難しいんです。全部消えた。

今西 農業は挫折したと？

中岡 諦めた。俺みたいの不器用な人間には農業はだめだと。もうこれでいくしかないという

ので、真面目に勉強して、翌年の試験を受けて入ったわけですね。

今西 50年に、入学になるわけですね、その時ね。

中岡 50年になりますかね？

今西 50年4月に京都大学理学部入学ですね。いや、47年に三高入学ですね。47年4月三高に行かれたわけですね。だから、いまの京大の人間環境学部があるところですよ。当時の三高ですからね。その頃、三高はどういう雰囲気でしたか。力石定一さんとかああいう人たちと、共産党をやっていた人たちとは関係なかったのですか。

中岡 力石なんかは、まず僕みたいに、こうあれていないから、要するに2年上ですね。

今西 力石さん。森さん、数学のね、森毅さん、萩原延寿さん、あの辺が同期ですよ。年齢的には近いんですけども、2年上になるわけですね。力石さんらが学生運動をやっていたわけでしょ、森さん、萩原さんはあんまりやってないんですけど。力石さんは三高で熱心に学生運動をやっていた。

中岡 そうですね。

今西 三高で共産党を作ったり、学生運動を始めたわけですよ。その頃影響受けられたことがあるんですか？

中岡 いえ、いやクラスが違うということがあつた。共産党には入らなかったから、だからそういう点ではあんまり影響はなかったですね。

今西 戦後はだけど、三高からわりと教師が追放されている人もいますよね。戦争中ピンタをかなり学生にやる教師がいて、そういうのを力石さんらが運動して、追い出したりしているんですけどね。

中岡 それはおそらく僕が入る前と違いますか？

今西 入った頃はもうそういう事件はほとんどなくて？

中岡 僕が入ってからはそういう記憶は全然ないですね。

今西 当時その日本史は中村直勝さん、東洋史

は宮崎市定さん、その辺が教えておられたんですが、あまり覚えておられないですか？

中岡 理学部ですから。覚えてないです。

今西 理工系の方の、とくに印象に残った先生というのは？

中岡 理科6組というのは、非常に珍しいクラスで第一外国語がフランス語で。僕が入ったときにできて、そしてそれが三高の最後になったから、結局1クラスだけになるんですね。だからフランス語は、伊吹武彦さんと生島遼一さんですよ。それでまあ、あの今から思いだしてみると本当恥ずかしいんですけども、フランス語の時間に生島さんがサルトルの話をして、つまりまだ輸入されていない洋書をタイプして、研究者の間で配ったりする、そういう時代ですよ。サルトルの『実存主義はヒューマニズムである』という論文を読んで、面白かったという話を講義してくれたんです。それで先生、それ貸してください。それで生島さんが貸してくれたのをボロボロにして返した。書き込みなんかはしてないですよ。けどしょっちゅう字引を引きながら、めくっては、生島さん返したら、ああと言って受け取ったけど、ようあの時に叱られなかったなど。

今西 先生の若い頃の影響に、マルクス主義と実存主義があるんじゃないかという感じをちょっと受けていたんですよ。生島先生の影響からサルトルなんか読まれたわけですね、当時実存主義の思想に興味をもたれたのですね。

中岡 サルトルとかカミュ。カミュはこれも生島さんの話を聞いてから、これはもうその時は丸善で買ったので、丸善まで注文しにいった、『異邦人』そして理解したかどうかはわからへんけど、とにかく読みました。

今西 その頃、ご自分でカミュの翻訳をされたんでしょう。

中岡 読んだ、つまり翻訳ではなくて、原文で読んだ。

今西 マルクス主義の影響というのはあつたんですか、三高入ってから。まだその頃は？

中岡 いやマルクス主義の影響はありましたよ。だからいろいろ、いろんなもうサークルは本当にいっぱいありましたよ、みんなあの知識に飢えている感じだったから、自然弁証法研究会だとか。

今西 三高でやられたんですか、自然弁証法研究会を。

中岡 ええ、資本論研究会だとか。その頃は選り取り見取りで。それで僕はやっぱり理科ですから、自然弁証法に興味があつて。そこで広重に出会ったわけですね。広重は1年上です。

今西 それで広重さんと交流ができたわけですね。自然弁証法研究会で会報を作っておられたんですか？

中岡 自然弁証法研究会の会報っていうのは、理学部へ行ってからでしょうね。

今西 三高ではエンゲルスの『自然弁証法』を読まれていたのですか？

中岡 エンゲルスを読んだのだらうと思いますが、記憶はそんなもので、あんまり面白いとは思わなかった。むしろ自然弁証法を学んだということよりも、広重たちと出会ったということの方が僕にとっては重要なことですね。

3. —京都大学：天皇事件前後

今西 それから理学部の方へ、50年に卒業されて行かれるわけですね。そこで宇宙物理学の専攻になるわけですね。

中岡 宇宙物理学へ行ったというのは、つまり京都一中の時代に天文学同好会をやったからです。

今西 天文少年の夢ですね。その頃はもう民科なんかの活動をやっておられたんですか？

中岡 民科はね、広重の影響が強いですね。広重が民科学生部の活動をずっとして、そしてあの広重がやっているから、彼の下走りみたいなことをやったという感じ。自分で民主主義科学者協会の学生部の会員になったという記憶はないですね。

今西 でも当時の国民の科学運動に参加されたわけでしょ？

中岡 参加したというのは、ついて歩いているからというのではないけれども、広重と一緒に理学部のなかの活動をやってたから、国民の科学運動にもかかわったということで。僕自身、国民の科学運動をやったという、そういう意識はないですね。

今西 だけど、佐倉惣五郎の幻灯をもって丹波の農村へ入ったりなんかしたのでしょうか。

中岡 滋賀県（大津の付近）です。

今西 滋賀県ですか。滋賀県の被差別部落のある地域に入られたって書かれていますよね。ああ、滋賀県に入られたんですか。

中岡 それは国民の科学運動とは関係なくですね。この頃多分共産党に入っていたと思いますね。

今西 先生がですか？それは指導されてというか、誰かに言われて行かれたんですか？

中岡 誰かに言われてではないですね。つまりその農村工作をやるなら、こういう形も面白いのではないかと。そういう格好で、幻灯をもって滋賀県の未解放部落に入ったということですね。

今西 それは山村工作隊活動とは全然別なんですか？

中岡 やっぱり山村工作活動の一環だと思うんですけども。その当時の共産党の軍事組織というもの、これは僕らには全然見えない、見えないものですからね。だから農村工作に行ったといっても、すごくランクがあるわけです。それで非常に重要なランクで選ばれた人間は、これは軍事訓練で、かなりあの、多分浅間山荘グループみたいな、ああいう形の活動を強いられたのだらうと。秘密にされているから、僕ら下部の黨員にはそんなことは全然分からない。

今西 Yという軍事組織があつて、京都で200人ぐらいいたらしいですね、当時Yはね。京大は榎並公雄さんですね。彼がYの責任者だったんですけどね。榎並さんとは親しかったんでしょ？

中岡 榎並とは、それ以後親しくなったんであつて。あの時にそんなに榎並と付き合いはない。

今西 Yの指導部の連中は、武装していつもピストルをもって歩いていたらしいですからね。

中岡 遙かに僕の知らない世界に榎並はいた。で、ある日突然、僕の下宿に現われて、公開質問書を書けるなら、お前しかないから、書けと。

今西 榎並さんですよ。

中岡 それは榎並が言うたわけです。しょっちゅう毎日仲良く話していた、その頃はそんな感じですね。

今西 ちょっと話が前後しますが、その入られる前に49年に看護学校事件が起こるわけですよ？6人の活動家の看護婦さんの認定を京大が認めなくて、看護婦資格を与えないということで、それで大騒動になって警察隊が入るといふ。それはもちろん三高におられたんですけど、見ておられたんですか？

中岡 そのときは集会とかには出た記憶はありますね。ですからいわゆる活動家という感じです。そしてあの共産党に僕が入ったのは天皇事件以後ですね。だから滋賀県の農村に行ったのもそれ以後ですね。

今西 看護学校事件があって、6人の看護婦さんの処分が撤回できなくて、その人たちは看護婦資格が与えられないまま、卒業させられたわけですけども。運動としては失敗だったと、後で運動をやった川口是さんたちは言っていたんですけど、当時としてはね。極左方針を出したんですけど、うまくいかなかった。その次に前進座事件がありますよね。前進座事件の時も見ておられたんですか？集会なんかに参加された程度ですか？

中岡 前進座事件には僕は参加、その辺の記憶がはっきりしないですね。

今西 処分が出ていますよね。同学会委員長の水口春喜さんが放学になり、副委員長の中塚明さんとか何人かが無期停学になった人たちがいますよね。1年落第する人もいましたけど。処分撤回運動もずいぶん起こってますよね。その時も多分集会出ておられるんだと思うんですけど、その渦中にあまりいなかったというわけですね。

中岡 ええ、そうですね。

今西 京大ってものすごくきついと私思うんですよ。最高処分は放学でしょう。ほかの国立大学も受けられないわけですよ。東大なんか退学するけどインチキで。山田盛太郎さんとかそういう人たちが学部長ですから、退学させるけれど、退学した人はほとんどが後で戻っていますよね。京大の場合だったら、松浦玲さんなんかみんなそうだけど、戻れないという状況ありますからね。京大の方がそういう点では、権力的というか強圧的なんですかね。

中岡 その辺は大学内部のことやから、僕は全然分からない。

今西 でもかなり処分されていますよね、停学、退学、停学、退学っていう形でね。あれだけ処分者を出しているというのもすごいと思うんですけどね。51年の天皇事件の方にもう一回話を戻しますが、榎並さんが書いてくれるように言ってこられたわけですね。共産党細胞の方から多分、はつきりいってあれですよ、中身は共産党色というか、階級闘争色ではない質問状ですよ。私は当時として、実に立派な文章であると本当に思っているんですけどね。あのときの先生の天皇観とか天皇制についての考え方ですが、あそこにまあ書かれているような人間天皇としては非常に不幸な形でね、それを利用する人たちに使われている、というような質問状を出されたわけですけども。ああいう天皇観ってどこから来ていると考えたらいいですか？

中岡 それはしかし、そんなにどこからという問題ではないような気がするんですけどね(笑)。あの頃に書いたものを、ちょっと二、三読み直してきたんですけども。自分で書いている文章でいえば、天皇の歓迎準備、歓迎準備の進行について非常に腹を立てている。それはあの文章に書いたとおりなんですよ。ようするに天皇の通路だけは綺麗にする。そして京大の玄関の前の道は舗装する。舗装するけれども10メートルいくと古いガタガタの道になる。

今西 京都駅からの改修工事ですよ。天皇が

通るところだけ。

中岡 僕は実際に見たことないから分からんけれども、天皇が降りるホームの柱を、要するに三方だけ塗って、それはつまり天皇の通路から見える部分だけを塗ってという話。これは本当かどうか知らない。

今西 いやでも当時の学園新聞なんかにも書いてますけどね。

中岡 噂ではそういうふうになって。

今西 その前に島津製作所に行くとかで、島津製作所も改修工事やるわけでしょう。天皇が通るっていうだけで。

中岡 やっぱりその思ったとおりを書いているわけですね。つまり、見えるところを塗れば、その裏側がどうなっているだろうかということ、気が付くはずがない。まぬけな人間という、そういう扱い方ではないかということですよ。

今西 天皇を馬鹿にしているわけですよ。

中岡 それで天皇をものすごく侮辱しているながら、神聖な存在として見ろという。そういう思想そのものが、要するに非合理の極地というか、合理的人間に対する侮辱であるという、そういうとらえ方。

今西 そういう憤りがよく表れていますよね。

中岡 それにもすごく腹が立って。ある意味では、だからまあ、あちこちで迎える人間が天皇の悪口だとか、いろんなことを喋っているわけですよ。そして一方ではそういうふうに見ながら、なんとなくどっか人間としては抜けたものがあるというようなところを、けっこう茶化したりしながら、かつそれを神聖な者としておくという。それは要するに合理的精神に対する侮辱であるという。すごくそのところに腹が立ったわけです。その腹が立っていることを、できるだけ正確に書いたという、その文章が公開されたわけですね。

今西 私は非常に率直で分かりやすく読みやすい文章だと思います。当時の共産党の一部の人のなかには、なまぬるい天皇批判であるとか

ね、そういうような言い方をする人がいますけどね。でもそうじゃなくて、人間らしい憤りがよく表れた文章だと私は思うんですけどね。

で、その天皇事件についてね、先生のご意見をちょっとお伺いしたいんですけども。例えば当時の学園新聞のなかでも、なぜ天皇をわざわざ京大に来さすのかということについてね。だから看護学校問題、それから前進座事件といった一連の過激な学生運動が京大で強くて、天皇をわざと挑発的に来させて、学生運動家たちが天皇を追い出したということで、学生運動を管理したり抑圧する体制を強めるために挑発したんじゃないかという意見もあるんですけどね。当時の学園新聞でもそういう意見がちょっと出ているんです。それはどう思われますか？

中岡 僕は、あの挑発とか何とかいう、そういう形で問題をとらえるのは違ってね。あの事件についていえば、僕はあの自分の一番思っていることをきっちり書いたと。それで事件がああいう形で起こって、そういう形で反応が起こるということは予期していたけども、いくつかあるんですが、予期していた大きな騒動のなかで、自分とは関係のない、その一番関係のない、あの事件と関係のないたくさん人間がたくさん処分された。

今西 小畑さんなんか学校にいなかったわけですからね。警察に捕まってたんですから。

中岡 しかもその、なんていうかな、彼らは田舎から来た何人かは、郷里でものすごくひどいめにあった。そのなかで、一番処分してくれていい人間が、そこから免れているというね。それは、すごく僕にとっては負い目になっているわけ。

今西 当時、先生には何の処分も下らなかつたんですか？

中岡 形式的、非常に形式論理なんですよね。つまり同学会の責任であると。そして、それが当事者であるかどうかということには関係ないと。つまり指導部、その同学会、組織としての同学会の責任は指導部が負うべきであると。だ

から中央委員、総務部中央委員の8人である。それは組織としても責任を負うべきであるというそういう論理ですよ。

今西 小畑さんは共産党も同学会も、天皇について何か強い抗議を表わすということは決めてなかったんだと。かなり自然発生的に起こった事件だと言っています。ただ文学部の一部と宇治分校の連中がかなり挑発的な行動をとったことはある、というふうな言い方をしていたんですけど。文学部で一番最初にプラカードを持っていたのは中塚明さんだと言っている人もいますけど。それは覚えておられるんですかね？

中岡 僕はね、やっぱりね、書いたあと怖くなった。だから、あの日は現場に全然行ってない。

今西 小松左京さんが木の上に登っていたとかそんなの見ておられないわけですね。それも問題になるんですよ。木の上から天皇見るとは何事だという話になってくるんですけどね。

中岡 非常に面白い話があるんですけどね、あの時にね、ご進講というのがあって、天皇はご進講を聞いた。経済でね、ちょっと誰が進講したかというのは分からないんですけどね（豊崎稔氏—今西）。その人が、経済の先生ですからゼミを持ってるわけですよ。ゼミでよく話をしたというんですけども、つまり喋っている時に、天皇が外で学生が歌を歌っていますね、あれは何という歌ですかと聞いた。それであれは平和を守れという歌ですと。そしたら天皇がなかなかいい歌ですねと（笑）。これは経済学部の学生のあいだにはだいぶ伝わっている話なんですけどね。作り話なのかね、本当なのかというのは、僕はよく確かめていないんですけどね。

今西 侍従日誌ではインターナショナルを歌ったということになってるんですよ。

中岡 インターナショナルも多分歌ったんだろうと思いますけれども、一番重点は、僕が聞いているところでは「平和を守れ」です。

今西 みんなそう証言してますけどね。侍従日

誌では取り囲まれて、インターナショナルが歌われたという話になってるんですけどね。警官隊が導入されることに対する反発もあったわけですか？天皇護衛のために管理されるということに対する。

中岡 まあやっぱり、あの当時の学生運動の状況から言えば、警官隊が来れば学生はものすごく興奮するでしょうね。それは当然だと思います。

今西 警官を入れた途端に、人の輪がものすごく広がったっていいですよ。ワァーとね。その時は、行って捕まるのはまずいと先生は行かずに家におられたんですか。

中岡 やっぱり怖かったというのが事実ですね。しかし自分としては、自信をもって精一杯のことを書いた。書いたけれども、こういう文章を天皇に向けて突きつけたら、どういう反応が起こるかだいたい見当がついている。行かなかった、行けなかった。

今西 ただ後で、京大にすごい量の投書が来ますよね、学園新聞なんかもそうですけど。そこでボロカスに、ものすごく狂った大学、「狂大」とか言うような、そういう感じで書かれたり、それからもう廃校にしまえというなね、やつがきたり。もちろん野間宏さんとか何人が闘争を支援するという手紙がありますが。かなり厳しい世論批判が出てきますよね。それから当時学生たちが処分反対の支援をしてもらおうと思って、共産党統一会議に行ったら、統一会議の連中が、当時民統ですよ。民統の連中から天皇陛下にだってことするんだってボロカスに言われたってようなね。また先生も書いておられますけれども、蜷川虎二知事なんて天皇を先導してきたし、天皇にたいしてそういう行いをするとは何事か、という発言をしていますよね。蜷川知事は天皇制支持者ですから当然そうなんだろうと思いますけど、そうとうひどい、後のバッシングがある。服部学長は、何回も国会呼び出されていますよね。京大に新しい管理法体制を作ろうという動きが国会のなかで議論されてきますよね。そういう反応はど

うだったんですか。その後の処分を含めてね。先生はちょっと負い目を感じたと言われましたけど。すごいその京大包围網のようなものができあがってきますよね。東大のポポロ事件が起こってなかったら、私は関心がかなり京大天皇事件の方に続いていたんじゃないかっていう気がするんです。あの時。管理体制みたいなものがもっと強化されるような法律、大学管理法みたいなものが強化されるきっかけになったんじゃないかという気がするんですけどね。

中岡 あまり反応が、大体予想していたとおりであるけれども。僕が思っているのは、服部学長と、角南学生課長が頑張ってくれたなど、僕が思っていることです。

今西 服部さんもだいたい国会に呼び出されてますよね。相当言われたんじゃないかと思うんですけどね。あの世論の動きだったら、もっときつい処分が出てもいいという感じだったでしょうね。でも8人のうち、当日その日いなかった人も処分されているから、随分不法だということ運動が起こってもいいのではないかと思います。

中岡 まあ、なんていうか、僕はやっぱり何人かの人間にたいしては負い目を感じている、今でも。

今西 それとちょっと話がかわるんですけど、先生もちょっと書いておられるんですけど、当時の共産党が山村工作隊とかああいう運動をやっていたり、それからまた経済学部が国際派と所感派に分裂しますよね。明日、経済学部の重田澄男さんと会う予定なんですよ、経済学部の話を聞きたいということで、彼に会う予定なんですけど。そういう当時のことは党外におられても分かりましたか？共産党の組織がかなり分裂しているとか混乱しているという。

中岡 国際派と所感派。対立そのものは当時非常によく分かっている、もう一つ軍事行動へ少ずつ行きつつあるというのは、これは事実であって、共産党へ僕が入ったのは天皇事件の後なんです、天皇事件のあと共産党へ入って、

そして入った年の2月に初めて軍事行動というのがあって。

今西 52年ですか？

中岡 天皇事件があったのは？

今西 51年です。

中岡 52年の2月ですかね。初めて共産党のそういう会議へ出たというのは、明日の朝、税務署を武力行使すると、そういうあれで。どこかのお寺に集められたんですよ。それで話を聞いて、これは入る時期を間違えたかな(笑)。

今西 もう相当やばい時ですよ、52年って。

中岡 税務署襲撃というのは、本当ひどい会議でした。行きたくない者はとにかく行くなど。行きたいだろという者だけ前に出ると。座っているお寺で一歩前へ出ると、そういう時に、前へ出ないでいるというのはちょっとありえないですよ。

今西 卑怯者で、裏切り者みたいですよ。

中岡 わりあい自分の考えというのは持っているつもりだったけども。やむをえず前へ出た。もちろん出なかった人間は一人もいなかった。集合場所が、どこそこで。明日の朝集まれと。朝の4時頃だったと思います。それで分担があって、そこへ。そしたら、石を持って、それぞれの分担した税務署の窓に石を投げると(笑)。石を投げてばあっと逃げるわけですよ。明るく日、その日の昼ごろになったら、税務署に正義の鉄鎚下される、というピラがあつて。それで僕はもうこんなんについていけないわ、いややということで(笑)。だけど本当に運命の別れ目で。僕は新米の党員であったから、それで済んだわけだけれども。ずっと前からいた人間はやっぱり、お前は何、お前は何って違った任務が与えられているわけですよ。実際農村に行った人間もあるし、もっと山奥に入って武装訓練、銃を撃ったりなんかいうようなこともやった連中もいる。そういう人間はね、もうすぐにダメになって戻ってくるんだけど。何人か、今でも付き合いがあるけれども、その時のことは絶対言わない、何があったかね、だ

けどすごく人間的に傷ついて帰ってきた。

今西 ノイローゼになったり、自殺したりした人もいますよね。

中岡 僕自身はずるい。ずるいというよりは、それ以後何回か、そういう種類の軍事行動が、2回ぐらいですね、京都の場合は。

今西 火炎瓶事件とかやりましたけどね。

中岡 あの2回目からは、僕は絶対大丈夫と思って集合時間に遅れていくわけ。それで何か言われたら、バスがちょっと故障したとか言うて逃げるつもりで、集合場所に行かないと。やっぱり本当に集合場所へ行って、そして火炎ビンを投げて、捕まった人間もいますけど。必ずしも僕は彼らに悪いとは思わなかったですね。3回くらいでもう、こんなみじめなことは止めよう、ということに多分なったんだろうと思います。

今西 荒神橋事件とかあの辺はおられたんですか？

中岡 その時はもう卒業していました。

今西 その時は、もう高校の方に就職されていた頃で。じゃああの事件には直接関係しておられないわけですね。だけど52年だったら、そろそろ総点検運動が共産党で始まってきていて、内部の雰囲気もものすごく悪くなっていく時期ですよ。だから「1952年夏」という小説を、小畑さんも書いておられますからね。相当学生内の雰囲気も悪くなっていった時期ですね。それともう一つお伺いしたいのは、当時のね、文学部もちろんそうなんでしょうけど、理工学部も、先生の書かれているものを読むと、ギルド的というかね。教授の指導とかね、そういうのが非常に前近代的というかね、すごい抑圧的な行動があったり、大学アカデミズムというものに対する反発というのが、先生の文章のなかでものすごい読みとれるんですけどね。そういうことは理工学部のなかで強かったのでしょうか？医学部はもちろん論外といてもいいくらい、我々の時代でもすさまじかったですからね。

中岡 僕はそういうものに対する反発はもちろんあったけれども。なんというか、そういうことを言う資格はないと思っています。理学部の講義へ出たことがほとんどない。

今西 学生運動で忙しくて？

中岡 学生運動というより、また広重との関係になりますけど。広重より1年下だったから、広重より1年遅れて京大に入っているわけですよ。京大に入ったら、広重がやって来て、理学部で自然弁証法研究会を作ります。それはOKということで。一学期はそのままよかったですけど、二学期になったら理学部自治会の改選がある。広重が、岩垂純二っていう卒業後、素粒子論で頭角を現してすぐ早死にした男なんですけど。岩垂を理学部自治会の長に立候補させる。ただ彼はちょっと気が弱くて頼りない。お前が副委員長になって、助けてやってくれないかと。広重との付き合いやからというんで、そんなら副委員長になろうかと。それで立候補して選挙があつて。理学部の委員長が岩垂、副委員長が僕。広重の予言通り、すごい闘争。これはなんていうかな、レッドパージ問題、レッドパージ反対闘争、それでストライキとか。広重の予想通りに、岩垂が病気になるって学校に出てこられなくなって。それで代わりに、しょうがないということで僕が前面に出て、交渉だとかそういうものに。それが終わったら今度は同学会の中央委員になれという。これは広重の指令ではないけれども。二学期のそういう闘争中に僕が書いたピラが学内でいくつか評判になったんです。公開質問状も結局その延長上にくるわけですよ。だいたい学内であのピラ誰になったかな、そうか中岡がまた書いたんかとか、つまりそういうことで段々と運動に深入りすることになって、結局一回生の前期以外は講義に出たことはないわけですよ。

今西 私もまったく同じですよ（笑）。朝昼夕とピラを書かされてましたからね。講義なんか行く時間なかったですよ。

中岡 だからね、あんまりそういう徒弟制と

か、なんかそういうことをいう資格がないわけです。

今西 でも文章には書いてありますよね？

中岡 それはありますけれども。

今西 京大っていうのは、あんまり自然科学者の戦争責任とか、そういう問題の追及というのはやらなかったんですか？たとえば、湯川秀樹さんだって、戦争中に原爆を作っていますよね。かなり海軍と一緒の国防研究会とかやったりしていますよね。そういうことはほとんど問題にしていけないですよ。理研グループだって、中身としては、大変問題ありますよね。そういうことはほとんど取り上げなかったんですか？

中岡 まあ、やむを得ないこととして、あまり誰も問題にしてないと思いますね、その責任は。むしろ理学部でいうと荒木俊馬、言論報国会かな。学内で随分いろいろ国防指導ということをやった。荒木俊馬はわりあいオーソドックスで、敗戦とともに責任を負って離職したわけですよ。

今西 東大の平泉澄と一緒にですよ。

中岡 だから、そういう主義のことは問題になったけれども。自分たちがやったことの戦争責任というのは今みたいな感じだった。

今西 もう一つ京大で不思議なのは、わりと戦中に追放された教官を、戻してないんですよ。たとえば、中井正一さんとかを追放しているわけですよ。治安維持法でひっかかった人たちを、それを京大に戻すということをやらないんですよ。人民戦線事件などで捕まった人たちを、東大はほとんど戻しているんです。京都大学における戦後の民主化とか改革というのは何だったんだというのが、引っかかるところがあるんですよ。

中岡 僕はそういう発想はなかったな。

4. —高校教師から技術史家へ

今西 当時はやっぱりそういう問題にならなかったんですかね。力石さんは中井正一さんを

戻す運動をしようとしたんだけど阻まれたというふうに言っていますね。それでも高校の方に、朱雀高校に行かれるわけですね。大学院へ行って研究はされたかったですか？アカデミズムは嫌だということが出ていったわけではないんですか？

中岡 行きたかった。

中岡百合 先生からやられた。

今西 天皇事件の張本人の一人だからですか？

中岡百合 主任教授にもものすごい嫌われたんよ。

中岡 嫌われたというより、こっちにも自覚がありますからね。一度も出てない。あなた関数論を取っていませんねと言われても、はいと言うしかない。

今西 若い頃の文章読むと、けっこう教授に媚びて卒論を書いてやるような奴は間違っているんだ、みたいなことをいっぱい書いておられますけど。

中岡 そういうのはそうだけれど。たとえば、物理実験法は3人組でやるんですが、僕は全然やっていないで、レポートの3人目に署名するだけでパスしています。こうしたことが、後の段階ですごくひびいて来ます。そんな批判が言える義理ではないわけですよ。ほとんどそういう基礎訓練はやってないですね、僕は。

今西 これも面白いと言ったら大変失礼ですけど、私も変わった経歴なんですから、先生も相当変わっておられる。朱雀高校の定時制でも教えられていた。だけど『現代における思想と行動』で、三一新書で200点記念懸賞として30万円もらって、これでしめたと思って、職場を辞めて、もう一回研究の世界に復帰しようと計画されて、自主的に辞められるんですよ。で、藪内清先生のところへ押しかけ弟子になるという。

中岡 そうですね。ある種の焦りとそれから自分自身に対する研究者、やっぱりもともと研究者になりたかったわけですから、研究者になることについての未練というのがあって。それで藪内先生のところへ行った。科学史なら、何とかそ

ういう関数論をやらないで議論できる、星雲の計算などはできないけど。だけど科学史なら何とかかなるだろうという、そういう考えですね。

今西 科学史という学問は、当時の自然科学のなかではあんまり率直にいて地位が高いわけではないわけでしょ。どちらかという学問の内容的に。物理学の第一線でやっているとか、そういう人は偉くて。科学史っていうのは予備でやるみたいなそういう扱いを受けていた時代じゃないんですかね。

中岡 地位が低いかどうかということは、全然問題はないですね。問題はないけれども、研究ということで身をかけるということについては、未練が残っているということですね。

今西 藪内先生を選ばれたっていうのは、アジアの科学史に興味があったんですか、その時から中国科学史に興味はあったのですか？

中岡 藪内さんは、天文学史の著書もたくさんありましたからね。

今西 博覧強記の先生ですからね。別にその時はアジアのことをそんなにやろうという意識を持っておられたわけではないわけですか？

中岡 ええ、山田慶児とはかなりその学生運動なんかも一緒にやっていて、行った時はすでに山田慶児は、藪内さんの下の助手だったわけですよ。それで藪内さんは天体力学の先生で、天体力学の講義はちょっと聴いたことがあって。それくらい関係で。藪内さんのところへ行行って中国天文学史をやるつもりは全然ありません。けれども科学史をやりたいので、山田慶児の隣に少し小さな机が欲しいと、しばらく面倒を見ていただけませんか、そういうふうなことを言うたわけです。

今西 でも49年の中国革命を経験されて、それもかなり大きなショックだったわけなんですよ。だから中国への関心とかずっと持ち続けておられますよね。そういうのはもうちょっと後なんですか、中国の問題とかを考えようと思ったのは。

中岡 やっぱりその頃の気持ちとしては、ガリ

レイの書いたものを読みたいというのが一番強かった。

今西 それは面白いですよ。資金が1年半ぐらいですぐ途切れてしまって、民間企業に就職せざるをえなくなってしまったという。計画は3年くらい研究するつもりが。

中岡 朱雀高校を辞めた時にね、27万、退職金なのか積立金なのか、何かしらんけど27万ももらった。三一新書の30万はスパッと出すような余裕はなかった。かなり何回かに分けてもらった。いずれにせよ、両方を足せば、2年ぐらいもつだろうというつもりだった。ところが、1年たってみると、みるみるそれが目減りした。それで、その時はまだ結婚はしていなかった百合の、お父さんに頼んで、その経営する工場で週何回かアルバイトさせてもらった。このことについては後に詳しく話します。それから、三高の時習った小堀憲先生（当時理学部数学教室教授）のついでで立命館大学II部で教養課程の数学を2コマ持つことになった。これで何とか、貯金の目減り速度を減らした。これで体制が安定して、その間神戸大の青木靖三を先生としてガリレイやカルダーノの勉強をやっています。この2年ほどは科学史の研究のうちこんだ時期です。2年ほど順調な年をすごした3年目の前に、立命の数学の時間割の教務配当をやっている理工学部の数学の主任教授がとんできて、3学部の文学部教授会はなんともいわないんだけど、法学部と産業社会学部二つの教授会から、その要するにそれが数学の教師とに配当されることを拒否するという。

今西 拒否するという事は、大学院を出てないやつは駄目だというわけですか？

中岡 それは反党分子ということで。公然とは言わないけれども、来たわけですよ。それで数学科の主任教授が私はまったく心当たりがないんですが、あなた心当たりありますか。大いにありますって（笑）。小堀さんに呼び出されてどうなんだ、というふうに言われて。小堀さんは多少政治力があつたから、立命館に科学

史という講座をどっかで置いてね、そしてそこへ私を押し込んでやろうという考えであったのです。この小堀さんからどうなんだと問われて、それは心当たりがありますとだけこたえた。ちょうど党派的に言うと、いわゆる構造改革派、構造改革派の、京都の構造改革派の流れというのは、実は榎並を中心にした。

今西 榎並さんは構革派に行ったんですか？

中岡 それで榎並との付き合いってというのは、天皇事件で彼に言われて、公開質問状を書いたという繋がりであって。京都の構造改革派というのが200人くらい、メンバーがいた。かなり大きな。もともとつくったリーダーは榎並であった。榎並はこう、そこを通り過ぎて社会党へ入党したわけですよ。そのことについては僕は榎並を若干恨んでいるわけですけどね。でもその結果として、京都の構造改革派をどうしてもまとめることが必要になって、やむをえず僕がリーダーとなった。これは間違いないわけですね。そして、京都の構造改革派の学生メンバーが一番多かったのは立命館です。おそらく学生メンバーは、100人くらいいたと思いますね。組織的にはね、僕がそれを指導したりとかそんな関係は全然ないんです。ないんだけど、系統から言えばやっぱり一番上に乗っている。それが立命館大学で数学などを教えていると。それが教授会で問題になっても不思議ではない。あんまりそういう時に、僕は勇ましく戦わないんで。僕はそういう点で批判されるかもしれないけど、僕がそこで数学で教えているということは結局、藪内さんと小堀さんとの繋がりを通してであった、そして藪内さんも小堀さんも僕の政治運動歴は全く知らないわけです。お二人のところにとぼちちりが行くことはさげたかった。小堀さんには、いや心当たりはあるので、辞めさせてもらいますと。そして、私、文学部はもう1年教えさせてくれたわけです。文学部でとにかくもう1年教えて、それで結局辞めた。それを辞めたとき、57万円が切れた時が大体一緒になるわけです(笑)。

今西 悲惨なことだったんですね。そもそも『現代における思想と行動』だって、中身はかなりきつい共産党批判ですよ。だから、1960年から相当激しく共産党を批判しているわけですよ。

5.——『工場の哲学』の誕生

中岡 だから、つまりそういう一連のもので。大体立命館大学が文学部を除いては大体共産党であるのは承知の上でしたから、それでどうしようもなくなって、もう一度百合の親に頼み込んで、その経営している会社に入れてもらった。

今西 ああそうなんですか、阪神溶接機材の社員というのはそうなんですか。

中岡 常務をやっていた。もともと大阪変圧機の子会社、大阪変圧機と神戸製鋼が、1:1で出資して作った子会社。あの高度成長期の一番成長産業、造船業の一番大きな技術革新というのは自動溶接、サブマージドアーク溶接法です。その溶接法のフラックスを作っていた。フラックスというのは原料はガラスなんですけど、ガラスの粉を溶接部に盛ってそのなかへ溶接のワイヤーをいれて、火花をとばすとガラスが溶けて、溶接部を空気から遮断するわけですね。そのなかへ急速にワイヤーを走らせて溶接する。そういう仕掛け。そのフラックスを作っている会社。

今西 そこで技術課長にまでなられているんですよ。

中岡 最初の時は囑託。まあ入社の際の面接で、つまり大体どんなことができるかっていうのは、経歴はこういうものだから、わからない。そっちから言うてもらえれば、できることを言いますから。統計的品質管理全盛の頃で、品質管理技術のなかで工場実験法というのがあるんですよ。工場実験法はどうですか。その時、初めて工場実験法というのを聞いた(笑)。それで丸善へ帰りに飛んで行って、増山元三郎『実験計画法』を取り出してばらばらとめくって、ああこれはあかんと。もう必死になってテ

キストを探したら、西堀栄三郎の『工場実験法』という薄っぺらい日科技連（日本科学術者連盟、戦後日本の品質管理「QC」運動を推進した有力な団体である）のパンフレットがあつて、それ立ち読みして。これならおれでも何とかできそうだと。工場実験法ならOKです、そしたらそれでいきましょうということで、若い技術者が5人いるから、その5人にその工場実験法を教えてください。だいたい週に4回ぐらいですね。若い技術者と一緒に、西堀さんの『工場実験法』を読むというね、研究会をやった。半分くらいやったところでね、テキストばかり読んでてもしょうがないから、いっぺん工場のなかで困っている問題があつたら、この手法でやってみようやないかという話になった。たまたまフラックスのなかのグレード20という製品がずっと不良率20%の状態である、それをいっぺんやってみてくれと。5人と一緒に分担して、西堀さんのテキストに従ってやって。何回か工場実験をやって。大体原因を突きとめて工程を改良して、1回目実験をやったんですよ。公開実験で。若い新米が果たして、我々が長いことを苦勞している20%を、どうしても減らせなかつた不良率を減らせるかなあというので、みんな興味津々でね。10チャージ実験をやって、最初から1チャージはまる、8チャージまで全部まるまる。その辺までいくと異様な雰囲気になって。9チャージやったらペケになった。その時の工場内のほつとしたような雰囲気、もう忘れられん（笑）。10チャージもペケになった。それでもって、みんなもほつとしたし、僕も大体分かつた。たぶん、繰り返していく間に、炉の中に何かがつまんでいくんだと、繰り返して増えているものをチェックしてみようと。それでずっと調べてまわつてね、初めて分かつたんですけどね、結局、組長がある成分をチャージが重なる度にほんのわずかな成分を増やしている。配合を調べて見たらすぐわかつた。その配合をどうしてこういう配合をするんだって組長に聞いてみたんですよ。そうしたらね、自分

は説明できないけども、経験的に言えばこうすれば不良がなくなると、長い経験のなかで。頼むから今度の実験するときには絶対に成分を変えないで欲しい、配合をと。そのちょっと増やすというのを禁欲してくれというので、2回目やったら、良くいったわけです。けっこうものすごい偶然なんですけどね、ガラスのなかに製品の品質が悪くなるのではなくて、ガラスですから、物性的には多分微結晶が析出するわけですよね。微結晶の析出を支配している成分を、どうしてか組長は自分の経験則で、少しずつチャージを繰り返すごとに増やしていくという配合法を。その成分がある限界をこえたところから結晶が析出していく。つまりそのこと自体は、工場実験法とは何の関係もないわけですね。今西 いやだけど、先生のやり方というのは、すごいですね。だから『工場の哲学』にまとめられて、我々もあれをテキストにして工場見学をあつた頃いろいろやって、醸造業の装置産業とかね、見て回つたんですけどね。非常に分かりやすい具体的であるということ、現場に即しているということね、現場の人間関係についてのね、非常によく掌握してね、やっておられたなど。一番衝撃を受けたのは、私は社会主義になつても肉体労働と精神労働の分離とか、単純労働と複雑な労働の対立がなくなるということをね、あの本で予言されたのは、私は非常に適切な指摘だと思つたんですけどね。ですから、ものすごく定時制高校の経験とか工場の経験とかが生きているわけですよ、学問のなかにね。それが私は非常に強みだと思つたんですよ。

中岡 結局やはり、女房のオヤジさんの工場で働いた5年間というのが最大の収穫ですね。工程をどういうふうに見るか、どういうところに着目するか。結局、技術的実践の仕事の速成みたいなものをそこでつかんだんだと思つた。今西 だからまず現場を見ろというふうに我々も言われて、工場を回ることを勧められたんですけどね。たしかにその経験則とかね、その人

間関係だとか、職場のなかでの差別の問題とか、いろんなこと見ていかないと、工場っていうのはつかまえないし、実態として分からないということを非常に実感されたんですね。

中岡 結局ね、結果として、その実験を成功させてから後、工場に正式に入社して、職員になってほしいという話になって、それはことわっていたのですが、立命問題で腹をくくって入社して働くことになったんですね。信用されたのはありがたいんですけども、その工場自体が僕が行く前から溶接のフラックスだけではつまらないという。それはなぜかというとその会社自体が、自動溶接自体がアメリカのユニオンカーバイド社の特許であって、ユニオンカーバイド社と契約して、そしてそこからもらったいろいろなスペックを使って操業している。それだけではもうひとつ会社としてはつまらんわけですよ。

今西 外国の特許をそのままやるだけですからね。

中岡 利益は全部親会社が契約で持ってってしまう。会社としてはつまらんから、独自の製品をもちたいということですよ。電解二酸化マンガンっていう、これは要するに昔の乾電池というのは二酸化マンガンが重要な素材、今のリチウムの役割を二酸化マンガンがやった。それでその二酸化マンガンは、結晶形がアルファ型、ベータ型、ガンマ型という三つあって、天然に産出するなかでガンマ型というのが非常に少ない。しかし電池に使った時の特性は、ガンマ型が抜群にいいわけです。ところが天然のガンマ型の二酸化マンガンは非常に少ないけれども、硫酸マンガン溶液を電気分解して作ると、陽極に二酸化マンガンができる。その二酸化マンガンは全部ガンマ型である。松下電気がハイトップっていう乾電池で戦後最初のブームを起こすわけです。松下電器のハイトップという乾電池は全部ガンマ型の二酸化マンガン、だからものすごく特性がいいと。電解二酸化マンガンというのはその当時、僕が阪神溶接機材にい

た当時は、すごく高い儲かる商品であって、それを三井金属と鉄興社っていう二つの会社が独占して作った。それは、もう一つの富士電気化学という浜松にある小さな会社なんですけれども、富士電気化学がやはり研究開発でガンマ型の二酸化マンガンを作るようになったけれども、富士電気化学の技術指導を受けて、阪神溶接機材が作るようになった。溶接のフラックス原料として非常によく使うのが炭酸マンガンであるということから原料の共通性を利用するわけですけど。つまり炭酸マンガンを硫酸で溶解して、非常に高い温度で95度くらいの温度で電気分解する。陽極に出てくるのが二酸化マンガン。それはまあ自社内の技術でやって、操業をはじめて、月産200トンの設備をつくって。鉄興社と三井金属の方は月産1000トン。阪神溶接機材は月産200トン。そういう状態で競争していたんですけども、ものすごい赤字で、溶接フラックスの方は年間3億ぐらい純益が出ていた商品なんですね。電解二酸化マンガンを始めたら、その損失で3億がパーになる。本社が、大阪変圧機も神戸製鋼もカンカンになって怒っていた。それをね、なんとかしてくれと。これは本当にいって到底僕の手におえる仕事ではなかった。まだその時女房と結婚してないんですけど、女房を獲得するためにやらざるを得ないという。結局僕がその仕事を始めたときは、トンあたり製造原価が19万円なんです。そのとき競争相手が売値トン14万円で売っているわけ。こっちが製造原価だけで19万。到底そんな競争に勝てるはずがない、向こうが月産1000トンでこっちが200トンと。まあいろんなことやりましたが、必死に頑張って、製造原価で15万切るところまで持って行ったら、向こうが売値で13万5000円。それでどこまで、ちょうどそれを3年やったんですね。3年目で製造原価11万5000円までもっていったら、2社の売値は10万円台と。そこまで来てね、もうあかんという数字。これ以上、知恵の出しようがないし、それもまった

くの素人なんですよ。まったくの素人が、だからどうやって経費を節減するか、技術的に問題にどうアプローチするかそういうことは随分収穫はあったけれども、もう本当にこれ以上は度量にあわんと。その仕事は、僕ひとりではなくて、もう一人、これはちゃんと工学部を出て、それも化学工学をやった技術者と組でやったんですけど。結局その男にもう僕はここまで、これ以上能力がないし、もう一つはやっぱり研究者になりたいという未練が残っていると。こっから先は君がやってくれということで。それで結局、SOSを出したら神戸外大、ちょうど三高出身の教授が辞める時だったんです。

今西 やっぱり三高人脈は強いですね。

中岡 その時、俺はもう続かんから辞める、と女房に言うたのは結婚した翌年なんですよ。

今西 68年ですよ。神戸外大のほうに行かれたのですね。企業から公務員になったら、収入はがたっと減りますよね。

中岡 原稿料を入れても、収入はその時が一番高かったでしょうね。阪神溶材の頃が。

今西 『現代の理論』に書いておられた頃までが。

中岡 それやりながら、『現代の理論』に書いてたわけですからね。

今西 それは『工場の哲学』でしょ、まとめたのはね。

中岡 暇ができるようになってから、きっちりまとめました。

6. —構造改革派の運動

今西 その70年から労働分析研究会をやられたわけですか？

中岡 70年7月からはじめてガリ版の労働分析第1号が8月に出ています。

今西 熊沢誠さんたちと一緒に？じゃあその頃に。

中岡 だから阪神溶材を辞めてから、労働分析研究会を始めたわけですね。

今西 1970年代は、公害とかいろんな問題が

出てきて、そういう議論が出てきた頃ですよ。先生の本がでて、宇井純さんとかいろんな人たちが『公害原論』を書いたりなんかした時期と重なりますよね？ちょうど日本で本格的に公害研究みたいなことが始まった時期でもあるし、労働問題研究、工場研究がわりと本格的に出た時期ですよ。これは誰がもちかけられたんですか。熊沢誠さんですか、やっぱり。

中岡 むしろこれはだから、ちょうどその構造改革派、統一社会主義同盟の大森誠人の存在が大きい。熊沢誠は、私の妻の百合の兄、浅沼万里の京大時代の同級生で、その頃からのつき合いでした。大森誠人が間にはいることで大森・熊沢・中岡が「労働」を研究の対象として結びつくことになった。

今西 構革理論というのは誰の影響が強かったんですか？井汲卓一さんとかそういう系統ですか？当時、長洲一二さんとかいろんな人たちが出てきますけど。

中岡 構造改革、これはやっぱりイタリア共産党の影響ですよ。だから、統一社会主義同盟の京大支部。それでこれはもうメンバーは、そうそうたるメンバーですよ。飛鳥井雅道、松浦玲、それから僕、藤沢道郎、谷川稔、それから槌田劭。これは公開してもいいでしょう。山田慶児は時々聞きに来ていたけども、彼は非常にはっきりしていて、入らなかった。

今西 山田慶児さんは、中国哲学や三浦梅園などに興味があったのでしょうか。

中岡 飛鳥井の家の二階で学習会をやった。でイタリア語学校を、藤沢さんを講師にして楽友会館で開催した。最盛期は2クラスであった。

今西 安東仁兵衛氏なども来ていたわけですね？

中岡 安東仁兵衛は関西へ来るとよくうちの家に来てた。

今西 いわゆる現代の理論グループですよ。そうすると当時は、安仁さん、飛鳥井さんの線が非常に強かったわけですね。

中岡百合 浮世離れした(笑)。

今西 浮世離れした。社会主義革命ですから

ね。労働問題やらんといかんという話になるのは当然ですよ。

中岡百合 いつもしぶしぶ引き込まれて前面に立つという。

今西 天皇への質問状を書いた時からそうですね。

中岡百合 全部そうです。その後も、積極的に自分が囁むということもね。

中岡 僕は辞めたい、辞めたいと言っているのにね。京大支部についていうと、飛鳥井がなんというか、要するに指導者でないといかんと言っていますよ。飛鳥井が言う、自分が指導するとは絶対言わない。その頃から、もう引きたいと言いながら、しかしずっと辞めていない。しかしその統一社会主義同盟というのはわりあい大阪で長い寿命があつて、結局まあ『社会主義と労働運動』という機関誌が、これも随分長い間出していて。これ今日持ってこようかなと思っただけでも。まあそれはずいぶん面白いネタがたくさん書いていて、薄っぺらいね。それを何年かな。

今西 その後また中国へも行かれていますよね？そのとき毛沢東とか、中国農業とか中国工業について書いておられますよね、いろいろ積極的に。中国の体験ってどうだったんですか？

中岡 中国は3回行きましたけれども。まあずいぶん中国のことは書いていますし。

今西 中国もメキシコも行かれたのでしょうか。

中岡 『私の毛沢東主義「万歳」』というの。

今西 読ませていただきましたけども。

中岡 あれは最後のところで、この「万歳」は、日本人が長く親しんだ人物を駅頭で見送るときに万歳というあの「万歳」であるというふうにしたし、そういうつもりなんだけれども、本の標題というのは恐ろしいもので、あれ

は毛沢東主義者であると。

今西 構改理論の毛沢東主義ってどういう思想なんですかね。どう結合するんですかね、毛沢東主義とグラムシがどう結合するんですかね。旅行記はいろいろ読ませていただきました、面白かったです。イギリス旅行記は大変面白かったです。

中岡百合 大変でしょ、みんな。大変な時にばかり行っているから。イギリスでは行った時、1ポンド410円、帰る時は1ポンド600円。メキシコへ行った時はものすごいインフレーションの最中。

今西 いや百合さん、大活躍やったと思いますよ。

中岡百合 今度もまた代わりましたよね。私ら行った時もちょうど労働党に初めて変わった時やったからね。労働党から保守党へ、キャラハンからサッチャーに。そしたら子供の学校の給食が、がらっと変わったんです。それが子供にとってはいまだにショックで。

西川祐子 どう変わったんですか？

中岡百合 最初行った時は、キャラハンさんを引き継いでいる時やから、子供たちの給食はスープからはじまってデザートまでのフルコース。その次はもうサッチャーになって一汁一菜。そして貧乏の家の子供はスクールミール。お金もってこんと、食べられないから。家からサンドイッチ持って。そういう時代になった。

今西 保険もがらっと変わったし、医療もあれですね、全然違ってきます。

中岡百合 あれはもうびっくりするような変わり方でしたよ。

今西 お疲れじゃないですか。今日は一応、ここまでということにしておきます。ありがとうございました。



いまにし はじめ◎1948年生まれ。1979年、立命館大学大学院文学研究科修士課程修了。1990年、農学博士（京都大学）。1996・2001年、韓国忠南大学交換・客員教授。主著：『近代日本成立期の民衆運動』（柏書房）、『近代日本の差別と性文化』（雄山閣）、『メディア都市・京都の誕生』（同）、『文明開化と差別』（吉川弘文館）、『遊女の社会史』（有志舎）、『近代日本の地域社会』（日本経済評論社）ほか多数。このように幕末・維新期の民衆史や部落問題が「専門」であったが、最近では、なぜか還暦を過ぎて樺太史や戦後史をやっている。私の経歴や著書については、「ウィキペディア」に載っているし、論文は、小樽商科大学の図書館のホームページからBarrelに入って、経済学科→今西一と引いていただくと読める。以前は「解放令」関係の論文がよく読まれていたが、最近では国内植民地論や1950年代の学生運動史に人気がある。